

文並び替え問題の作成と解法

片 上 英 俊

はじめに

本稿は「文並び替え問題の作成と解法」と題し、文並び替え問題の作成と解答の方法について解説したうえで、担当科目での実践から得られた知見について報告する。

担当科目「文化人類学 A・B」では平常点と課題レポートの点数をもとに、成績評価を実施している。平常点とは一般に、試験以外の出席、授業態度、提出物（ノート、プリントなど）、小テストなどにあたえる点数のことだが、私の担当科目では全 15 回のうち 12 回の授業で課題（homework assignment）を出して、その点数を「平常点」としている。

それに対して、担当科目の学習目標は、「文化の視点から人間とその生活について説明できるようになること」「文化という言葉を正確に定義できるようになること」「物事を筋道を立てて述べるという表現技術を身につけること」の三つである。そして、この学習目標の特徴は、人間の文化にかんする専門的な知識や考え方にくわえ、論理的な表現技術についても、その習得をめざしていることである。したがって、平常点の対象として、授業期間中に教室で出題する課題については、学期末の試験やレポートとは異なり、授業当日に学んだ知識や考え方への理解の確認とともに、論理的な表現技術を習得する機会にすることが求められた。

以上の事情から、担当科目では平常点の対象である 12 回分の授業内課題については、当日の授業で学んだ内容への理解の確認とともに、論理的な表現に必要な技術の習得を念頭において、問題の作成を心がけた。そして、2022 年

度からの対面授業の再開をうけて、担当科目では全 12 回の授業内課題のうち、後半 6 回の課題について、文並び替え問題を考案して回答用紙への記述というやり方で実施してきた^(注 1)。

そこで、本稿では、教員や学生の方々と知識や知見を共有することをめざして、担当科目における教育活動のなかから、文並び替え問題にかんする取り組みをまとめ、その概要を報告する。本稿の構成を紹介すると、第一章では文並び替え問題について、その定義を行なうとともに、この問題の特徴についてまとめる。次に、第二章、第三章では文並び替え問題の作成と解法について解説する。最後に、第四章では担当科目に導入した文並び替え問題の概要を述べたうえで、実践から得られた知見について報告する。

第一章 文並び替え問題—定義とその特徴—

本章では本稿で扱う文並び替え問題について、その定義を行なうとともに、その特徴について述べる。

1. 本稿で扱う文並び替え問題について

まず、一般的な意味での文並び替え問題 (sentence order exercise) とは、複数の文を正しい順番に並び替える問題のことだ。

並び替え問題には、並び替えの対象が字 (letter)、語 (word)、語句 (phrase)、文 (sentence)、段落 (paragraph) などの違いにおうじて、さまざまな種類がある。例えば、学校の英語科目では、英文法の知識や、英文構造の理解能力を明らかにする目的で、語や語句を中心とする並び替え問題が出題されている。それに対して、文並び替え問題は、並び替えの対象が文であり、複数の文を正しい順番に並び替えるという問題である。

それに対して、本稿で扱う文並び替え問題は、題目の語句や文の前後関係を手がかりにして、複数の文を正しい順番に並び替える問題である。この文並び替え問題は、一般的な意味での文並び替え問題とくらべ、(1) 題目を伴う点、(2) 語句や文の前後関係をもとに並び替えるという点で、特殊な文並び替え

問題になっている。そこで、次の項目では、本稿で扱う文並び替え問題の特徴について述べる。

2. 本稿で扱う文並び替え問題の特徴について

本稿で扱う文並び替え問題には、(1) 論理的に正しい順序に並べる、(2) 題目が設置されている、(3) 文頭に接続詞を伴う、という三つの特徴がある、そこで、本節ではこの点について説明する。

まず、本稿で扱う文並び替え問題では、論理的に正しい順番に並べられているかどうか为正誤の基準になっている。一般的な意味での文並び替え問題では、複数の文を正しい順番に並び替えるが、その「正しい順番」の基準については、設問ごとにその都度、指定される。それに対して、本稿で扱う文並び替え問題は、文や文章が論理的に並べられているかどうか、「正しい順番」の正誤の基準となっている。なお、ここでの「論理的」とは、物事が順序づけられていて、筋道が通っている状態という意味である。

次に、本稿で扱う文並び替え問題では、例えば「ヒトのあいだでの交換という分配行動について」のように、題目が設けられていて、題目の構成要素である語や語句のあいだに、何らかの関係が存在している。そもそも、題目 (subject) とは題材 (material) のなかから自分を取り上げて論じ伝える特定の事柄のことである。また、結論とは題目について論証や調査によって導き出される見解や事実のことである。このように、題目には結論を導くという役割がある。そして、本稿で扱う文並び替え問題では、題目が設けられていて、題目の構成要素である語や語句のあいだの関係にしたがって、文を並び替えるという形式をとっている。

次に、本稿で扱う文並び替え問題には、題目の構成要素である語や語句のあいだに、何らかの関係が存在しているということである。構成要素 (constituent) とは、物事や現象を形作っている個々の基本的な部分や要素のことだ。例えば、上述の「ヒトのあいだでの交換という分配行動について」という題目では、「ヒト」「交換」「分配行動」が構成要素であり、これらの構成要素によ

って題目が構成されている。そして、本稿で扱う文並び替え問題では、題目の構成要素、そして、構成要素のあいだの関係に着目して、文を並び替えていく(注2)。

最後に、本稿で扱う文並び替え問題では、並び替える文の文頭に、接続詞を伴うことである。接続詞とは、例えば「したがって」「しかし」のように、後に述べる事柄が、前に述べた事柄に対して、どのような関係にあるかを示す語のことである(日本国語大辞典「接続詞」の説明を一部改変)。接続詞には、順接(だから、したがって)、逆接(しかし、けれども)、累加(また、および)、選択(あるいは、もしくは)などの種類がある。なかでも、列挙の接続詞とは、「最初に」「次に」「最後に」、あるいは「第一に」「第二に」「第三に」などのように、後に述べる事柄が、前に述べた事柄に対して、内容や要点においてどのような順番にあるかを示す接続詞のことである。そして、列挙の接続詞を用いると、文章と文章がどのような関係にあるかを示すことができる。

本章では、並び替え問題の種類とその概略を紹介したうえで、本稿で扱う文並び替え問題の定義とその特徴について述べた。そして、本稿では上述した特徴をもつ限定的な意味の文並び替え問題を、「本稿で扱う文並び替え問題」もしくは、たんに「文並び替え問題」と表記する。

第二章 文並び替え問題の作成とその手順

本稿で扱う文並び替え問題は、(1) 題目の作成、(2) 題目の構成要素への分解、(3) 並び替え文の作成という手順で作成する。そこで、本章ではこれら三つの作業について順番に解説する。

1. 題目の作成

本稿で扱う文並び替え問題の作成にあたっては、最初に、学生に問いたい事柄を題目にするという作業を行なう。題目とは題材のなかから取り上げて論じ伝える事柄のことである。そして、文並び替え問題の題目は、さまざまな題材から作成することができる。とくに、授業科目のばあいには、当日の授業で教え

た事柄のなかの基本的な事柄や重要な考え方について、授業で紹介した重要語句を用いて、題目を作成する。

例えば、文化人類学の授業で、人類とその進化について、取り上げたとする。その授業で登場する重要語句は、「人類」「人間」「ヒト属（脳が大型化した人類のこと）」である。そして、学生に問いたい最も基本的な事柄が何かといえは、人類における人間の位置づけである。なぜなら、日本語では例えば「人類愛」などのように、「人間」のことを「人類」とも呼ぶことがあるので、初学者にとって、両者の違いがよくわからないことが多いからである。そこで、この授業で学んだ内容を題材にした文並び替え問題では、例えば、「ヒトというヒト属の人類について」という題目を作成することができる。

本稿で扱う文並び替え問題は、このように題目をつくることから始める。図1は実際に担当科目の授業内容から作成した、文並び替え問題の題目の一例である。

ヒトというヒト属の人類について
ヒトのあいだでの交換という分配行動について
西アジアの一神教が人間関係のあり方に及ぼす影響について

図1 文並び替え問題の題目の例

2. 題目の構成要素への分解—叙述の順番を決める—

次の作業は、題目を構成要素に分解して、叙述の順番を決めるという作業である。本稿で扱う文並び替え問題では、題目から並び替え文を作成する。そこで、並び替え文を作成するための準備作業として、(1)作成した題目から構成要素を抽出して、(2)構成要素の論理的な関係を整理し、叙述の順番を決めるという作業を行なう。

まず、題目から構成要素を拾い上げる作業についてである。そもそも、構成要素とは物事や現象を形作っている個々の基本的な要素のことである。そして、並び替え文を作成する際には、文並び替え問題の題目を構成している構成要素を抽出するという作業を行なう。例えば、「ヒトというヒト属の人類につ

いて」という題目のばあい、「ヒト」「ヒト属」「人類」という語が用いられているので、「ヒト」「ヒト属」「人類」がこの題目の構成要素である。

次に、構成要素の論理的な関係を整理し、叙述の順番を決めるという作業を行なう。まず、本稿で扱う文並び替え問題では、題目の構成要素である語を用いて文を作り、文章を作成していく。そこで、その準備作業として、題目から抽出した構成要素について、その意味内容をもとに、構成要素の論理的な関係を考え、その関係にもとづいて叙述の順番を決める。

例えば、「ヒトというヒト属の人類について」という題目のばあい、その構成要素は「ヒト」「ヒト属」「人類」である^(注3)。そして、ヒトはジャワ原人やネアンデルタール人などとともにヒト属の一種であり、(ヒトを含む)ヒト属は人類の一部を構成するという関係が成立している。したがって、この題目における構成要素の叙述の順番は、以下ようになる(ローマ数字は題目の構成要素である語を用いて作成する文の、叙述の順番を示している。また、矢印は前の語や語句が、後の語の一部であることを示す)。

(③ヒト→②ヒト属)→①人類

また、「西アジアの一神教が人間関係に及ぼす影響について」という題目のばあいは、「一神教」「人間関係」「影響」が題目の主要な構成要素である。それに対して、一神教という宗教では、人間にとって神との関係がより重要になっていることで、人間と人間の関係に影響が及んでいる。そして、一神教の成立以前に、人間はすでに存在しており、人間と人間の関係も形成されていたわけであるから、この題目における構成要素の叙述の順番は、以下ようになる(「一神教」から「人間関係」に向かう矢印は、一神教が人間関係に及ぼす「影響」を表す)。

(②一神教→①人間関係) = ③影響

以上が題目を構成要素に分解して、叙述の順番を決めるという作業の概要である。

3. 並び替え文の作成

最後の作業は、並び替える文を作成する作業である。まず、並び替え文の作成にあたって、最初に行なう作業は、題目から分解した構成要素である重要語句について、その定義を文にすることである。定義とは「物事を正確に意味づけること。また、(意味づけた)その内容」である。そこで、題目の構成要素となっている重要語句について、定義の文を作成する。例えば、題目の構成要素に「一神教」という重要語句があるばあい、「一神教とは唯一絶対の神への帰依を説く宗教である」という具合に、一神教の定義の文を作成する。

次に、定義の文を補う必要があるばあいは、補足の文を作成して追加する。定義の文を補う判断の目安は、問いたい事柄を定義の文だけで十分に言い表すことができているかどうかである。そして、問いたい事柄を定義の文だけでは十分に言い表すことができないばあい、重要語句の定義に説明文を補足する。例えば、一神教の「唯一絶対の神への帰依を説く宗教」という定義だけでは、一神教における神と人間との関係のあり方がどのようなものであるかを、十分に伝えているとは言いがたい。そこで、「そして、一神教という宗教では神と人間との関係は極めて重要である。なぜなら、一神教では人間ではなく、唯一絶対の神だけが人間を救うとされているからだ」のように、定義の文の後に、補足の文を追加する。

最後に、作成した並び替え文の文頭に接続詞を置いて、叙述の順番を明示するという作業を行なう。接続詞とは後に述べる事柄が前に述べた事柄に対して、どのような関係にあるかを示す語のことである。そこで、接続詞の選択にあたっては、題目の構成要素の文の文頭に接続詞を置いて、叙述の順番を明らかにする。そのばあい、「まず」「次に」「最後に」などの列挙の接続詞を使用すると、題目全体における構成要素間の関係を明快にすることができる。また、題目の構成要素の定義の文に、説明の文を補足しているばあいについても、接

続詞を文頭に置いて、文と文との関係を示して、叙述の順番を明らかにする。

以上の作業で、本稿で扱う文並び替え問題の完成である。そして、出題にあたっては、回答の仕方や実施方法におうじて、設問を作成する（巻末資料には紙の回答用紙への記述方式の文並び替え問題の例を掲載した）。

第三章 文並び替え問題の解法

本章では文並び替え問題の解答の導き方について解説する。本稿で扱う文並び替え問題では、以下の作業を行なったうえで、設問の指示にしたがって答案を作成する。

- (1) 題目の構成要素をもとに文の集合をつくる
- (2) 文の集合「内」の叙述の順番を決める
- (3) 文の集合「間」の叙述の順番を決める

そこで、以下では図3の文並び替え問題を事例として取り上げながら、(1) 題目の構成要素をもとに文の集合をつくる、(2) 文の集合「内」の叙述の順番を決める、そして、(3) 文の集合「間」の叙述の順番を決めるという作業について説明する。

1. 題目の構成要素をもとに文の集合をつくる

そもそも、構成要素とは物事や現象を形作っている個々の基本的な要素のことである。そして、本稿で扱う文並び替え問題の題目には、例えば「一神教」「人間関係」「影響」のように、複数の構成要素が存在していて、題目はその組み合わせによって作られている。そして、選択肢の並び替え文についても、題目に登場する構成要素が含まれている。そこで、最初の作業として、共通の構成要素をもつ並び替え文を、一つの集合にまとめるという作業を行なう。

例えば、「西アジアの一神教が人間関係のあり方に及ぼす影響について」という題目は、「一神教」「人間関係」「影響」という構成要素で作られている。

そして、この題目の並び替え文には上記の構成要素のいずれかが用いられている（図3の並び替え文を参照）。そこで、同じ構成要素を含む並び替え文を、一つの集合にまとめると、三つの文の集合ができる^(注4)。

最後に、実践的なやり方としては、図3のように、題目の各構成要素の下に、選択肢の並び替え文を記号などで記せば、簡単に、選択肢の並び替え文の集合をつくることができる。

2. 文の集合内の叙述の順番を決める

次の作業は、文の集合「内」の叙述の順番を決める作業である。(1)の作業によって、題目の構成要素ごとに、選択肢の並び替え文の集合ができあがる。そこで、次に、集合内の文の内容や、文頭の接続詞を手がかりにして、叙述の順番を決めるという作業を行なう。

例えば、図2の選択肢の並び替え文は、「人間関係」とそれに関連する構成要素をもつ文の集合である。そして、本稿で扱う並び替え文では、構成要素である重要語句の定義を書いたうえで、その文を補足するというやり方で文が作成されている。それに対して、(f)の文には「人間関係」の定義が述べられているので、この文が叙述の第一番目になる。次に、(f)の文には「人間関係」という語句にくわえて、「集団」という語が使われている。それに対して、(g)の文には、(f)の文に登場している「集団」という語をうけるかたちで、「集団」の定義が述べられている。また、(c)の文では「人間関係」「集団」の定義をふまえて、これらの語を組み合わせて文が作られている。したがって、この例題の文の集合における叙述は、(f)(g)(c)という順番になる。

また、実践的なやり方として、接続詞に注目する方法もある。本稿で扱う並

- (c) そのため、人間関係の一般的なあり方は、集団が人間が集まってできた一つのまとまりであるため、当事者たちの結びつきは深いものになりやすい。
- (f) まず、人間関係とは集団における人間と人間との関係のことだ。
- (g) また、集団とは人間や物が集まってできた一つのまとまりである。

図2 「人間関係」とそれに関連する構成要素をもつ並び替え文

び替え文の文頭には接続詞が置かれている。そこで、並び替え文の文頭の接続詞の論理的な組み合わせを考えることによって、文の集合における叙述の順番を推測することができる。

3. 文の集合間の叙述の順番を決める

最後の作業は、文の集合「間」の叙述の順番を決めるという作業である。本稿で扱う文並び替え問題の題目は複数の構成要素によって作られている。そして、題目の構成要素のあいだの論理的な関係にもとづいて、おなじ構成要素から成る文の集合体（＝段落）を単位に、文章が組み立てられている。そこで、題目の構成要素のあいだの論理的な関係や、文頭の接続詞を手がかりにして、（共通の構成要素から成る）文の集合体の叙述の順番を考えるという作業を行なう。

例えば、「西アジアの一神教が人間関係のあり方に及ぼす影響について」という題目のばあい、「一神教」「人間関係」「影響」という構成要素で作られている。そして、一神教が成立する以前に、人間は存在していて、人間と人間との関係は形成されていたわけであるから、「一神教」「人間関係」「影響」という構成要素でまとめられた文の集合体の叙述は、(1) 人間関係 (2) 一神教 (3) 影響という順番になる。

また、文の集合体の叙述の順番についても、前節で紹介した接続詞に注目する方法を用いることも可能だ（図3の並び替え文の接続詞のうち、四角で囲んだ接続詞が並び替え文の集合どうしの関係を示している）。また、文の集合体のあいだの順序を示すばあい、列挙の接続詞が用いられていることが多いので、文の集合体の叙述の順番を考えるさいの手がかりになる。

以上が、本稿で扱う文並び替え問題の解法についての説明である。

「題目」西アジアの②一神教が①人間関係のあり方に及ぼす③影響について

(d) (b) (e) (f) (g) (c)

(a)

- (a) したがって, 西アジアの一神教は人間と人間との関係よりも, 神と人間の関係の方が相対的に重要であるため, 人間関係が浅くなりやすい, という影響を及ぼしている。
- (b) そして, 一神教という宗教では神と人間との関係は極めて重要である。
- (c) そのため, 人間関係の一般的なあり方は, 集団が人間が集まってできた一つのまとまりであるため, 当事者たちの結びつきは深いものになりやすい。
- (d) それに対して, 西アジアの一神教とは唯一絶対の神への帰依を説く宗教である。
- (e) なぜなら, 一神教では人間ではなく, 唯一絶対の神だけが人間を救うとされているからだ。
- (f) まず, 人間関係とは集団における人間と人間との関係のことだ。
- (g) また, 集団とは人間や物が集まってできた一つのまとまりである。

↓

(f) まず, 人間関係とは集団における人間と人間との関係のことだ。(g) また, 集団とは人間や物が集まってできた一つのまとまりである。(c) そのため, 人間関係の一般的なあり方は, 集団が人間が集まってできた一つのまとまりであるため, 当事者たちの結びつきは深いものになりやすい。(d) それに対して, 西アジアの一神教とは唯一絶対の神への帰依を説く宗教である。(b) そして, 一神教という宗教では神と人間との関係は極めて重要である。(e) なぜなら, 一神教では人間ではなく, 唯一絶対の神だけが人間を救うとされているからだ。(a) したがって, 西アジアの一神教は人間と人間との関係よりも, 神と人間の関係の方が相対的に重要であるため, 人間関係が浅くなりやすい, という影響を及ぼしている。

図3 文並び替え問題の例題と解答

第四章 文並び替え問題の実践

本章では, 担当科目において実施した文並び替え問題について, 実施の概要, 要点と工夫, 実践からの知見について述べる。

1. 授業内課題への導入とその概要

担当科目では平常点の対象である12回分の授業内課題(5点満点, 計60点)

のうち、後半6回の課題について、文並び替え問題を毎回一題、出題した（巻末の資料を参照）。そこで、出題の手順について（1）回答用紙の配布、（2）問題の出題と回答、（3）回答用紙の回収と採点の三つにわけて、その概要を述べる。そして、文並び替え問題の採点にかんして、そのやり方と採点の結果についてふれる。

まず、課題を実施した回の授業中に、氏名と回答記入欄を設けた専用紙（A5）を教室で配布した。次に、本学の授業支援システム「コースパワー」から、設問のPDFファイル（A4）の配布を行なった。そして、回答については、宿題として授業時間外に、（題目とともに）正しい順番に並び替えた文章を全文、手書きで書くことを求めた。最後に、回答用紙の回収と採点については、次の回の授業前に、教卓に提出用のトレイを設置して回収した。また、回収した答案は採点后、表計算ソフトに入力して、コースパワーのフィードバックという機能を用いて、学生に採点結果を通知した。

文並び替え問題の採点にかんしては、部分点はつけず、正誤のみを採点した。そして、正答には5点、誤答には2.5点をつけた。2025年度の「文化人類学A」（青山キャンパス）のばあい、2クラスの全6回の平均正答率は57.3%だった（履修者は各200名）。また、正答率の最高値は75.4%、最小値は35.4%だった。採点結果を出題内容と照らし合わせると、問題の題材となった内容が難しくなるほど、また、選択肢の数が増えるほど、正答率が低下する傾向がみられた（巻末の資料として掲載した文並び替え問題のばあい、正答率は72.2%である）。

2. 導入における要点と工夫

次に、担当科目において文並び替え問題を実施したさいの要点と工夫について述べる。

まず、文並び替え問題の課題への導入にあたっての留意点は、紙の回答用紙への記述というやり方で、その実施を試みたことだ。そもそも、文並び替え問題における回答方法としては全文を手書きで書くやり方の他にも、正答を選択する選択方式などがある。また、回答の媒体にはマークシートやオンラインな

どがある。そして、これらの回答方法やその媒体には、回答用紙の配布・回収、採点、集計において、一長一短がある。なかでも、紙の回答用紙への記述はもっとも煩雑なやり方といえる。

それに対して、文並び替え問題の課題への導入にあたって今回、並び替えた文章の全文を紙の回答用紙に記述するというやり方を採用した。なぜなら、毎回の授業で出す課題のねらいは、学期末の試験やレポートとは異なり、学習目標を達成する能力の評価よりも、その能力を養成することだからである。ここで、視写(transcription)とは文字として書かれたものを見て、そのとおりに書き写す学習法である(かつては「全文書き取り」とよばれていた)。そして、視写には速記力や集中力の向上にくわえ、文章の構成や表現技法の理解を促進する効果があるとされている(デジタル大辞泉「視写」)。そこで、担当科目では、視写による学習効果をねらって、並び替えた文章の全文を手書きで書くという回答方法を採用した^(注5)。

次に、文並び替え問題の実施にあたって工夫したことは、並び替えた文だけでなく、題目についても、回答用紙への記入を求めたことだ。本稿で扱う文並び替え問題は、題目の構成要素になっている語や語句ごとに、選択肢の文の集合(=段落)を作り、文の集合内と集合間の関係をそれぞれ考えたうえで、文を並べるという手順で解いていく。このように、題目は問題を解く手がかりになっている。そのため、学生に解法を指導するときには、最初に、題目を検討することからはじめる。そこで、学生からの文並び替え問題の解法にかんする質問や疑問に迅速に対応できるように、題目についても、回答用紙への記入を求めた。

最後に、文並び替え問題の実施にあたって、採点の効率化を図るために、正しく並び替えた文章を全文、手書きで書くとともに、文頭の接続詞に下線を引くことを学生に求めた。紙の用紙への回答を記入するというやり方では、出題者が手作業で採点を行わなければならない。それに対して、本稿で扱う文並び替え問題は選択肢の文の冒頭に、接続詞が置かれている。そのため、接続詞を拾い上げていけば、答案の正誤を簡単に判定できる。そこで、文頭の接続詞

が判別しやすいように、接続詞に下線を引くように指示を出して、採点の効率化を図った。また、（正しく並び替えた文章の）接続詞の順番を覚えておけば、課題を受け取った時点で、正解と不正解の答案を選び分けておけるので、採点の手間を省くことも可能である^(注6)。

3. 実践からの知見

最後に、授業内課題として文並び替え問題を出題するなかで、気づいた事柄について述べる。

第一に、本稿で扱う文並び替え問題については、学生に解法をあらかじめ伝達しておくことが望ましいことである。文並び替え問題は、論理的な表現技術にかんして、問題を解くという実践をとおして、段落の構成や、（段落内の）文章の構成の技法への認識を深めるという効果を期待して出題している。つまり、学期末の試験やレポートのように、その能力の有無や程度を調べるために行なっているわけではない。したがって、論理的な表現に必要な技術の習得を目的に、文並び替え問題を実施するばあいは、回答の方式に関係なく、学生に解法を事前に伝えておくことが望ましいと感じた。

第二に、文並び替え問題の課題への導入にあたっては、複数回実施して、学生にその解法を習得する機会を設けた方がよいことである。本稿で扱う文並び替え問題は、題目をもとに一定の手順にしたがって回答する。そのため、回答の手順への理解が不十分であると、正答率が下がる。そして、文並び替え問題における一定の手順を理解し、それを正しく実践するには、解法が事前に伝えられていても、すべての学生が直ちに実践できるわけではない。そのため、一定回数の試行が必要になるのである。したがって、文並び替え問題の課題への導入にあたっては、複数回実施するのがよい。また、文並び替え問題を一定回数、実施すれば、問題の難易度について、単純な並び替えから、複雑な並び替えへと難易度を段階的に上げることも可能になる。

第三に、文並び替え問題の出題にあたっては、採点の結果を学生に伝えるとともに、指導の機会も必要になるということである。まず、採点結果を伝えれ

ば、学生は自分の回答方法が適切であったかどうかを判断することができ、次の回答のさいに役立てることができる。したがって、文並び替え問題の出題にあたっては、原則、採点の結果を学生に伝えた方がよい。しかし、解き方の事前伝達や結果の通知だけでは、学生が文並び替え問題の解き方を必ずしも習得できるとはかぎらないので、何らかのかたちで、学生に対して直接、指導の機会を設けることが望ましいといえる。

最後に、文並び替え問題にかんしては、回答方法には記述方式、選択方式などが、また、回答の媒体には紙の回答用紙、マークシート、オンラインなどがある。採点にかんしては、選択方式、マークシート、オンラインが優れている。また、採点結果の通知ではマークシート、オンラインはデータを入力する必要がないという点で優れている。一方、担当科目で採用した、紙の回答用紙による記述方式は、採点とその結果の通知という点で作業が大変だが、学生に答案を示しながら、指導や質問疑問への対応ができるという点で、優れていると感じた。まとめると、文並び替え問題の実施にあたっては、どのような目的で出題するかによって、それにふさわしい回答の方法、回答の媒体を選択することが重要といえる^(注7)。

おわりに

本稿では、文並び替え問題についてとりあげ、その作成と解答の方法を解説したうえで、担当科目での実践から得られた知見について報告した。今回、担当科目における文並び替え問題にかんする取り組みを文章にまとめることで、その知見を共有することができれば幸いである。

なお、今回の報告では議論の制約のため、文並び替え問題が論理的な表現技術の習得とどのように関連しているのかという点について、十分に検討することができなかった。本稿で扱った文並び替え問題は、題目を手がかりに並び替え文の集合を作ったうえで、文の集合「内」と、文の集合間の叙述の順番を決めていく、という手順で解いていく。また、授業内課題への導入にあたっては、視写による学習効果をねらって、並び替えた文章の全文を紙の回答用紙に記述

するというやり方を採用した。それに対して、論理的な表現技術とは物事を順序づけ、筋道を通して表現する技術である。したがって、本稿で扱った文並び替え問題の解法の手順にくわえ、全文記述方式の回答方法が、「物事の順序づけ」や「筋道を通すこと」にどのように寄与するのが検討されなければならないが、この点については機会を改めて論じることにした。

注

- (注1) 全12回の授業を対象に実施した課題のうちの前半6回の課題では、当日の授業にかんする要約などの文章を全文書き取って、重要語句の定義や、接続詞に下線を引くという問題を順に出題した。
- (注2) 言語学の統語論では構成要素 (constituent) を「構成素」とよび、研究が進められているが、本稿では「構成要素」という語を、一般的な意味で用いている。そこで、本稿では「構成素」ではなく「構成要素」という語を使用する。
- (注3) ヒトとはホモ・サピエンスの和名である。
- (注4) 段落とは内容などで区切られた文の集まりのことだ。共通の構成要素をもつ並び替え文を一つの集合にまとめていくという作業は、段落をつくるという作業に他ならない。
- (注5) 池田の著作には、視写という学習法が学習者の読み書きに劇的な変化をもたらす様子が描かれている [池田2011]。
- (注6) 文並び替え問題の作成にあたっては、接続詞の目視による採点ができるように、同一の接続詞を使用しないようにした（並び替え文の数は限られているので、このやり方は実行可能である）。
- (注7) 本稿で扱う文並び替え問題は、コースパワーを利用すれば、出題、回答、採点、採点結果の通知まで、すべてオンライン上で行なうことが可能である。

文献

- 池田久美子『視写の教育—〈からだ〉に読み書きさせる』〈シリーズ『大学の授業実践』(3)〉, 東信堂, 2011.
- 片上英俊『大学授業科目における課題レポート—『文化人類学A』での採点結果とその分析』『青山スタンダード論集』8, 2013, pp. 41-56.

「文化人類学」第十二回 西アジアの一神教（通常課題）

〈問題〉「題目」を書いたうえで、題目の重要語句の関係をもとに文を並び替えて論理的な文章を作成し、接続詞[※]に下線を引きなさい（文頭の記号は省略すること）。

「題目」西アジアの一神教が人間関係のあり方に及ぼす影響について

（a）したがって、西アジアの一神教は人間と人間との関係よりも、神と人間の方が相対的に重要であるため、人間関係が浅くなりやすい、という影響を及ぼしている。

（b）そして、一神教という宗教では神と人間との関係は極めて重要である。

（c）そのため、人間関係の一般的なあり方は、集団が人間が集まってできた一つのまとまりであるため、当事者たちの結びつきは深いものになりやすい。

（d）それに対して、西アジアの一神教とは唯一絶対の神への帰依を説く宗教である（第12回作業シート）。

（e）なぜなら、一神教では人間ではなく、唯一絶対の神だけが人間を救うとされているからだ。

（f）まず、人間関係とは集団における人間と人間との関係のことだ（『デジタル大辞泉』の項目「人間関係」を一部改変）。

（g）また、集団とは人間や物が集まってできた一つのまとまりである（日本国語大辞典）

[※]接続詞とは後に述べる事柄が前に述べた事柄に対して、どんな関係にあるかを示す語のこと。